

秋の章

一

「ぎっ、やあああああああああああああああああ！」

耳を劈く叫び声を上げると、寝ぼけた颯太の手を引つ掴んだまま、雫は廊下を全力で駆け出した。蠟燭の火が消えて、辺りは帳が落ちるよう暗くなる。

「な、なんだなんだ雫」

漸く目を覚ました颯太が、引きずられながら混乱して問うが、雫に応える余裕などない。今の化物の澱んだ笑い顔が臉にべったりと焼き付いて、雫はもう、振り返ることすら出来ない。

廊下の突き当たりまで来たところで何とか足を停めると、雫は其処にあった柱に手をついた。息が詰まる。何も考えられない。またしても悪夢に呑み込まれたような心地がする。

一方で颯太は口を開けたまま、ぽかんと呆気にとられていた。

「おい雫、どうしたというのだ」

「どうしたもこうしたもない！ 今、さっき、なんか変なのが……」
と、ここまで云ったときだった。

雫は何か掌てのひらに、妙なぐりぐりとした感触があることに気づいた。
自分が手をついている、その柱を見る。

すると、節くれ立った古木の柱に、

幾つも幾つもの、老人の顔が浮かび上がっていた。

ぎよろぎよろとした眼で、此方を見ている。

そうして彼らは、ぼそぼそと喋っている。

妙な感触は、掌の下で彼らが鼻を蠢かしているからだだった。

「ひ、わああああああああああああああああああっ！」

雫は諸手を挙げると、また違う方向へ走り出した。灯りはもう手元になかった。今度は颯太も、顔を引き攣らせている。雫も丸腰ではどうしようもなかった。否、刀を差していたところで何が出来たわけでもない。何も考えず、ほとんど目を瞑って二人は走り続ける。

すると、今度は下の方から、自分にぴったりと寄り添って走るような、ことごとくという小さな音が聞こえた。

ことごとく、ことごとく。
あからさまに厭な予感を覚えて、雫はそつと眼を開くと、己の足元を見た。

其処には——身の丈四尺はあろうかという大きな鼠が、老僧の如き奇つ怪な顔を雫の方に向けて、駆けていた。

ぎろりと雫を見上げたそれは、歪んだ声でこう云った。

「吾かにもあらず」

云うなり、天井からぼたぼたと、

数えきれない程の小さな鼠が落ちてきた。

悲鳴を上げることも出来ずに、雫はそれらを振り払い蹴り飛ばす。

そして、手近にあつた襖を開けると、その中へ颯太と共に転び入った。

力任せに襖を閉じる。途端に辺りが、しんと静まり返った。荒い息を抑

え、気を静めながら、雫は周りを見廻す。其処は、畳敷きの小さな客間のようだった。こぢんまりとした、感じのよい部屋であった。

だが——。

「こんなところに、部屋があつたか——」

ぼそりと颯太が云う。え、と雫は漏らす。

その時。

——ぱちり。

瞼が開く音がした。

窓の棧に張られた障子の全てに、びっしりと張り付くようにして大きな

眼が、眼が、眼が、眼が、眼が、眼が、

眼が。

数え切れないほどに、在った。

眼の群は雫を、気が狂わんばかりに強い眼差しで、じつと見ていた。

「あ、あ、あ……」

雫は震えて後ずさりながら、背後に在るはずの襖の取手をまさぐる。

しかし、襖は開かない。ぴたりと閉まったまま、微動だにしない。否、

違う。何時の間にか、襖はなくなっている。雫は振り返った。

背後は、ただの壁になっている。

隣に立つ颯太も、ひたすら茫然とするばかりだった。

——ばん。

天井から、大きな音がした。

ばん、ばん、と、何かが強く、頻りに天井板を叩いている。

何が、かは判らない。

再び二人が正面に向き直ると、部屋の中央には、何時の間にか布団が一組敷かれていた。その中には、こちらに背を向けて、見知らぬ女が眠っている。

雫はまた、厭な予感を覚える。

そうして見ている内に、次第次第と浴衣から伸びる女の首が、長くなっていく。ずるずるずるずると、引きずり出されるようにして伸びていく。

女はまだ、此方に顔を見せない。首だけが、暗い部屋の中を煙のように揺らめいている。

雫は、一步も足を踏み出すことが出来ない。

ふと見遣ると、床の間に掛けられた掛け軸の中に、毒毒しい顔をした女の絵があった。

女は此方を見て、けたけたと嗤っている。

けたけた。けたけた。けたけた。けたけた。

けたけた。

「こ、れ……颯太の絵じゃ、ないの……」

「——見れば判ろうが」

美しく流麗に描かれた女は、胡乱な眼をして、お齒黒を晒し、無為にけたけた嗤っているだけだった。

気がつけば正面、びっしりと眼の憑いた障子の向こうに、

大きな大きな、影が映っていた。

影はぼやけて、姿が判然としない。

しかし、手に何かを持っていることだけは判った。

そしてその何かを振り回しながら、

それはゆっくりゆっくりと、

此方に近づいてきている。

近づいてきている。
近づいて、きている。

そこが——雫の限界だった。

雫は声も上げずに身を翻すと、何時の間にかに元に戻っていた背後の襖を勢いよく開けて、颯太を引っ張って、真っ暗な廊下へ飛び出した。

——厭だ、厭だ、厭だ。

走って、奔^はって、走って、奔^はって。

目を瞑ったままの二人は、虚ろで禍禍しき者共から、懸命に逃げた。
すると。

突然どん、と雫は何かにぶつかった。

そのまま思い切り尻餅をつく。つられて颯太も、廊下に転がった。

——何だ。今度は、何だ。

怯えた雫は身を竦め、目を開けることすら出来なかった。

しかし、頭上からはこんな声が聞こえた。

「こんな夜中に何してるんだいお侍様、東雲様まで。危いから廊下を走らんじやありませんよ」

目を開けてみれば、それはきよとんとした顔の巴だった。片手に行灯を提げている。

半端にはだけた浴衣が、やけに色っぽかった。

「は、はは……」

すっかり力の抜けた雫は、何も云い返せなかった。

二

「お化けだってェ」

明くる朝。

律儀に訪ねてきた桜も加えて、皆が再び、浄瑠璃姫の部屋に集った。そうして雫が昨晚何があったかを告げると、巴はそんな頓狂な声を出したのである。実際明るく日が射し込み、雀のさえずる音の聞こえる部屋では、

如何にも不釣り合いに聞こえる。

「うちの宿でかい。さあて、ついぞ聞いたことがないねえ」

「でもそう言われても、私たちはお化けに追い回されたんです。ねえ颯太」隣に向かって話しかけた雫が見遣ると、颯太はこくりこくりと舟を漕いでいた。コラッ、と雫は颯太の額を叩く。

「大事な話をしてるときに寝てるんじゃない！」

「——んあ。部屋に帰ってから雫が寝かしてくれないからだ」
眼を擦り、欠伸をしながら颯太は応えた。雫は赤面する。

あの後部屋に戻ってからも、夜明けまでは大分時間があつたのだが、どうにも怖くて寝付けなかつたため、大した話もないのにずっと颯太に話しかけ続けて起きていたのである。

二人のそんな会話を聞いて、桜がやたら動揺した調子で尋ねてきた。

「な、何をなさっていたので御座いますか——」

「ん。夜伽だ」

簡単に颯太が応えると、紅潮した桜はますます動揺した。何か勘違いされている気がして慌てて雫は取り繕う。ましてや桜は、雫のことをまだ男だと思っているのだ。何を想像されているか判つたものではない。

ごほん、と大きく咳払いをすると、雫は話を元へ戻した。

「で、それはともかく……妖怪が湧いて出たのは確かなことで……」

「——わらわを追ってきたのじゃろう」

重重しく浄瑠璃姫が云った。

「否、まだ判らぬな。ただ町に入り込んだ妖怪が、偶さかこの宿に現れたのかも知れぬ。まあいずれにせよ昨日も申したように、この部屋には結果が張つてある。わらわがこの部屋に居る限り、妖怪どもが入り込んでくる気遣いはない。じゃが、早い内に何とかせねば、わらわの居所も遅からず、妖怪どもに知られよう」

御剣、とか申したな、と姫は雫の方へと向き直つた。

「一体何をしておつたのじゃ。昨日はわらわを守ると胸張つて云い切つておつたではないか。それがいざ妖怪を目の前にしたらなんじゃ、ぎやあぎやあ喚いて逃げ惑うだけか。情けない。武士の猛き志はどうした」

さすがの雫も、言い訳のしようがなかった。だって怖かつたんだもん、

などと云おうものなら、今度は何を投げつけられるか判つたものではない。
項垂れたまま、雫はこう云つた。

「……今後は、善処します」

「頼んだぞ。わらわとて——こうしておるのが精一杯じゃ」

小さな声で、姫はそう云う。よくよく見てみると、扇子を持った姫の手は、細かに震えていた。口では気丈な事を云つてはいるものの、心中は穏やかならぬのも当然であろう。

雫は余計に申し訳なくなり、そして、これからは何としても姫を守り抜かねばならない、と誓いを新たにした。

「あのう——よろしいでしょうか」

すると、遠慮がちに桜が口を開いた。雫は尋ねる。

「どうしたの？」

「実は、昨日の帰り際のことなので御座いますが——こちらの宿へ向けて、一羽の大きな大きな鴉が飛んでいくのを眼にしました」

「カラス？」

そう云われて雫は一瞬戸惑うが、すぐに昨日のことを思い出した。桜と別れるときに見た雄大な富士の姿、そしてそれに被さるように飛んでいく、大きな鳥の影。ひよつとすると、あれのことだろうか。雫は眉を顰める。

（あれが、カラス……？）

それにしては随分、大きかった気がした。桜は続ける。

「近頃町の中でも、あちこちで頻りに鴉を眼にいたします。今朝方も、そこいら中で見かけました。普段はさほど、多く目にする鳥では御座いませんから——」

桜のそんな言葉を聞いて、雫は一瞬首を捻つたが、すぐに、

（ああ、今の日本みたいに一杯餌場もないから、まだそんなに数が増えてないんだ……）
と思ひ直した。

「初めは偶偶だろうと思つていたのですが、昨日の今日でそのようなことがあつたのなら、何か関わりのあることなのかも——」

「鴉が来て、それが妖怪を運んできたって云うのかい」

半信半疑と云つた風でニヤリと笑うと、巴は云う。

「あたしの宿に妙な物連れてくるようなのがいるんなら、あたしがお手製の
大砲と改造火縄銃引つ張り出して、一撃で仕留めてやるんだけどねエ」
「大砲って……」

何やら物騒なことを云いだした巴はさておいて、雫は腕組みをすると、
考え始めた。

——その大鴉がもし、邪鬼の魅の凝ったもの、だとすれば。

桜の言が確かなら、それを打ち倒せば妖怪どもは消え去っていくということになる。仮にそれが邪鬼そのものではなくとも、江戸がこのような状況になっている以上、無関係ではあるまい。調べる価値は充分にある。桜は更に云った。

「それに、昨晩は町中にもこれまでとは比べものにならぬほど多くの妖物が現れた、と人の噂に聞き及びました。御剣様方がご覧になったのも、もしかするとそのうちのものではないかと」

「ふむ。あの妖怪共を鴉が呼んだか、或いは逆に、鴉の姿をして町に忍び入ったか——どちらにせよ、ありそうな話ではあるな」

ようやく目が醒めてきたらしい颯太は真面目な顔でそう云ったが、またすぐ大欠伸を漏らす。昼寝でもしかねない勢いである。我儘なのは姫と同じだが、あちこち彷徨きまわる分、颯太の方が余程性質が悪い。

しかしとりあえずはそんな余計な懸念は忘れることにし、雫は考えを口にした。

「でも、そんな大きなカラスが人目に付かずに居られる場所なんて、あるのかな。妖怪なら自由に姿は隠せるのかも知れないけど……」

「——だ、か、ら」

その時、苛立ちを無理に抑えた声音で、浄瑠璃姫が云った。

「それを調べるのが、そなたの仕事ではないのか御剣」

「え？」

「まだ昼前ぞ。侍が何時までのうのと屋敷の中でくつちやべっておるのじゃ。わらわを助けるのであれば、事が起こる前に手を打つのが筋であるう。ええ。違うか」

身を乗り出すなり般若の形相で姫は睨め付けてくる。怖い。言い訳を考える前に、ハイ左様に御座います、と雫の口から自然と出た。傍らでは巴

が、猫のようににやにやと笑っている。

ならば何をしておる、と云って、姫は手に持つ扇子でパンパンと畳を幾度も強く叩いた。

「ほれ、判ったら汝ら、とつとと出て行かぬかッ」

尻を蹴り飛ばされる前に、雫と颯太と桜は部屋から飛び出した。

三

「守ってもらってるっていうのに、よくもまああんな高飛車な態度が取れるよね……」

宿の表に出てから、雫は口を尖らせぶつくさ云った。隣で桜が苦笑する。陽の下で見ると娘子は、今日も薄桃色の可愛らしい着物を纏っていた。

「まあ、姫様は姫様なりに怖がっておいでなのでしょう——あ」

そこで何かに気づいたららしい桜は、不意に宿の屋根を見上げた。つられて雫も眼を向ける。

屋根の上には、真っ黒な羽を震わせた鴉が七、八羽、並んで留まっていた。首を回し、瓦の上を歩き廻り、時折ぎやあ、ぎやあと禍しく鳴いている。何を思いか知れぬその小さな黒い瞳が、薄気味悪く輝いていた。

暫く雫達はその濡羽の群を見据えていると、すぐに、視線に気づいたかのようにして連中は、ばさばさと何処へともなく飛び去っていった。

雫は呟いた。

「あれが……？」

「はい。今朝方よりは少し減りましたが——」

桜は小さく頷いた。確かにあの鳥たちは、少し様子がおかしかった。周囲を見廻してみても、江戸の町はさして鴉の多い処ではない。あの集まり様には、何かしらの故があると見える。否、鴉ばかりでなく——伽羅倶利屋の周りだけ、何か雰囲気が歪んでいるように雫には感じられた。

暗く、澱んだ気が立ち籠めている。

しかし、そうして深刻に話す二人を他所に、妙にそわそわした様子の颯太は、いつもと変わらぬ楽しげな調子でこう宣った。

「ま、そんなことは気にしても詮方なからう。よし雫、桜。早速市中を見

回りに行くぞッ。私についてこい」

そしてそのまま返事も聞かず、早急に颯太は歩き出してしまふ。こいつは遊びたいだけじゃないか、と些か呆れつつも、雫は桜と共に、その後へと続いた。確かに、案ずるばかりでは何も始まらない。

そうして二人を伴い、江戸の街路を歩いていくうち、雫はふと、気づいた。

肌に吹き付ける風が、昨日と比べてやけに心地よくなっていた。夏らしい熱を持った湿り気が失せ、代わりに流れる枯れた薫りが、心に優しく感じられる。

何気なく雫は、隣を歩く桜に話しかけた。

「それにしても……ずいぶん涼しくなったね」

「はい。もうすっかり秋で御座いますから」

「……え？」

さらりと告げる桜に唾然として、雫は目を円くする。桜は小首を傾げた。

「どうか——なさいましたか」

「いや、今何て」

「ですから、もうすっかり秋だと」

「あ、き？」

雫は何が何やら判らなくなって、眉間に皺を寄せた。

昨日この世界に降りたつてすぐ、今日の前で手を振って歩いているお目出度い奴から、夏の盛りだと教えられたばかりである。しかし、そう云われてみると空気、雰囲気、何もかもが間違いなく、雫もよく知るこの国の秋のものになっていた。

薄曇りの和らいだ陽射し。時折急に吹き荒ぶ寒風。大きな屋敷の庭木も枯葉を付け、それが路の端に幾葉か落ちている。傍には蟬の乾いた死骸が転がっていて、如何にも侘しい心持ちにさせられた。柿の木に実がついているのもそちこちに見かける。往来を行く人人の身形も昨日と違って、心なしか厚着になっていた。否、そんな瑣末なことよりも、この空気を感ずれば、誰であつてもこれが秋であることは判る。

何がどうなっているのか判らず、雫は再び桜の顔を見た。

しかし桜は、不思議そうにその小振りな顔を傾げるだけだった。

——ああ。

そう云うことか、と漸く雫は合点がいった。祖父と共に眺めた泡沫絵巻、奇妙なところは、時代がない以外にもう一つあったのだ。

四季が、一つ絵の中、分け隔てなく一時いちじきに描かれていたのである。

絵巻の始まりは確か夏、青青とした草木があり、更にその少し先には、枯れ木が描いてあったように思う。つまりそれが今、そのままの形で雫の周りに起きているようだった。

桜のこの様子も、時代について尋ねたときと同じこと。疑つてはならぬ事だから、疑わないのだ。これに疑念を持ったが最後、絵巻の世界は立ちゆかぬ。そういうものなのだ、と受け止めるより他ない。絵巻の中の人々は、初めからおかしいとは思わないのである。

瞬きながら此方を見つめてくる桜に向かつて、ううん、何でもないんだ、と誤魔化しながら、しかしこの調子だと明日には冬になるのかな、寒いのは嫌だな、と考えて、雫は空をぼんやりと見上げていた。

しかしその後は——これと云った収穫のないままであった。

収穫がなかったのは、専ら颯太が原因である。結局のところ、颯太の行きたい処へ二人が付き合わされているばかり、要するに、昨日の遊行の続きをやっているだけだったのだ。

秋の香りの満ちた町並みを巡り、店屋を冷やかし、蕎麦屋で昼食を摂り、川縁かわべりの柳の木の下を、枝を掠めながら三人して歩く。途中で寄った呉服屋で新しく羽織を買ってもらったため、雫としてもなかなか文句を云えない。

そして、何処へ行っても颯太は、一人ではしゃいでいた。

「あのさあ颯太……」

「ようしそろそろ八刻やつとくだ。次はあそこの茶屋へ行くぞ。何か、手掛かりが得られるかも知れん」

人の話をろくに聞かないまま、先に見える朱い傘と緋毛氈ひもじきんを指さすと、颯太は行き交う人の波の中を突き進んでいく。桜は困ったように笑い、そして雫は首を振って、深深と嘆息した。

じきに店先の縁台に腰掛けた三人は、団子を食べ、茶を啜った。そも

そも何をしに出てきたのか判らなくなるほど、長閑な時間が過ぎていた。

颯太は終始、にこにここと機嫌良く笑んでいる。桜は少食らしく、ちまちまと囓るようにして食べている。雫も初めは渋い顔をしていたが、半ば自棄になって口に放り込んだ団子が、思いの外美味かったため、少しだけ頬を緩めた。そうして、顔を上げる。

秋空が美しい。

「お侍さま」

不意に可愛らしい声が耳に届いて雫が顔を向けると、そこには何処かの童が三人ほど、人懐こい澄んだ眼で集まっていた。三人ともぽうつと口を開けて、あどけなく雫を見上げている。

綺麗な鞆を大事そうに抱えた、小さな女の子が尋ねてきた。

「なにしたらっしやるの」

「え？ んー……そこにいる、へらへらしたお兄ちゃんの付き添い。ふらふらどっか行ったりしないようにね。お団子、あげようか」

雫がそう云うと、三人の童子は顔を見合わせ、にっこりと笑った。

丁度一串残っていたので、一人に一つずつあげることにする。差し出された三つの小さな手に渡してやると、美味しいね、と云いながら、童たちは頬張っていた。

嬉しく思いながらも、雫は少し思った。

(侍と町人って、こんな交友的だったのかなあ……)

しかし、本当のところなど、結局誰にも判らぬのだ。雫の聞き知っていることとて所詮、後世の学者が文献を元に得手勝手に想像したことに過ぎぬ。もしかしたら真実は、この絵巻の方かも知れぬではないか。ならば、疑ったところで何も始まらない。

そうして雫が童たちを相手してやっていると、幼い方の男の子が近寄ってきて、雫が腰に差していた竹光に不意に触った。そして、鼻づまり気味の大きな声を上げる。

「あれえ、軽いよ」

「おいお前、お侍さまの刀に触っちゃいけないんだぞ」

兄らしい大きい方の男の子が訳知り顔で叱る。雫は苦笑した。

「私のは、別にいいよ」

「どうして、本物の刀じゃないの」

女の子が、円い眼を更に円くして訊く。

「うーん……」

雫は考え込んだ。予算の都合上、などと正直なことは云えない。否、果たして颯太の懐が足りたところで、自分は真剣を差すだろうか。どうせ殺生などはしないのだ。ならば、張る見栄もないというのに刀など持っていたところで、詮方ないことだろう。

そう云えば、江戸時代の侍の中には実際、生計が立たずやむなく刀を質に入れ、竹光を帯刀していた者もいたと聞く。雫と同じく、身形を整えるためだけのものである。ならば、中身の有るや無しやは意味がない。

詰まるところ、必要なのはこの漆塗りの鞘だけなのだ。

「……重たいから、かな」

最後に何となく、雫はそう応えた。

そうこうしているうちに、ようやくお八つを食べ終えたらしい颯太がこの子達に気づき、よし、お兄ちゃんも遊ぶぞ、と云って騒ぎ出した。子供たちは大喜びだったが、誰よりも子供じみているのは颯太である。何をして遊ぶかを率先して考えているのだ。面倒見がいいわけでも何でもなく、ただ単に一緒に遊びたかっただけなのだろう。雫は頭が痛くなった。

「——どうかありませんか、御剣様」

桜が微笑みながら云う。半ば判った上で云っているようだった。桜と目を合わせている内に、雫もついには吹きだした。

「ふふふ……まあ、いっか。楽しそうだしね」

雫は縁台に両の手をつけて、この地に出来た最初の友人を見る。

子供たちと駆け回る颯太は、誰よりも無邪気に、笑っていた。

四

たちまち、黄昏刻になる。子供たちが名残惜しそうに帰る一方で、辺りは段段と薄暗くなってくる。灯りも何もない江戸の町は、忽ち影に満ちた怪しげな雰囲気に包まれ出した。昨日と比べても、日が沈むのが格段に早くなっている。

「……夜が長くなるということは、これから妖怪あやかしが蠢く時間が長くなるということか」

「ん、何か云ったか雫」

一番名残惜しそうに子供たちへ手を振っていた颯太が、雫の呟きを聞きつけて問う。今日何をしに宿を出たか、微塵も憶えていないらしい。

唇を突き出して、雫は嫌味っぽく応えた。

「べ、つ、に」

「何だ、教えてくれたっていいだろうに」

意地の悪い女は嫌われるぞ、と聞こえるか聞こえないかの小さい声で颯太は云った。耳聴く聞きつけた雫は、頭に血を上らせる。

「ちよっと、こんなときだけ女扱いか!？」

「何時私がお前を男扱いした」

「のっけから禪ぜんを買ひ与えておいてよくそんな口が利けるな」

「そっちこそ、段段男口調が板についてきているぞ」

「だからそれもこれも何もかもあんたのせいだ……」

「——私は、お前のことは初めから女だと思ってる」

「なっ……何を、そんな、今さら、しれっと」

「動揺するところも可愛いな。あはは」

「このッ」

これ以上ないほど顔を真っ赤にした雫が握り拳を振り上げ、颯太が両手で頭を庇うと、少し離れて二人の様子を見ていた桜が、くすくすと笑い出した。そして云う。

「仲がよろしゅう御座いますね」

あっさりと思う云われてしまい、雫は何も返せなかった。ふふん、と得意げにしている颯太を横目に見て、始末はつまつの悪い思いになる。

ふと雫は、自分の顔に手を当ててる。

頬の熱は、未だに去らない。

(うーん……これは、ちよっと……マズいな)

そんなことを考える。

ふう、と息を吐く。

そして、思った。

これは、

——これは、そう、絵巻の中の絵虚言なんだ。

すぐ手の届くところだからからと笑っている颯太を見ながら、雫はそう思いこんで、もやもやとした想いを胸の奥底へと押し込めた。

曇天の所為もあつて、江戸の町並みは時刻の割に暗かった。

三人は宿に向かつて歩く。早朝に宿を出たきりで、もう随分刻が経つ。

さすがに少し疲れたか、颯太も余り喋らなかつた。一方、昨日は早急に違う方角へ別れた桜が、今日は一緒の道を歩いている。不思議に思った雫が問うてみると、桜は、

「実は、巴様が、今日は泊めてくださると——それも、只で」

と心から申し訳なさそうに応えた。

「そ、その、ご迷惑だろうと何度もお断り申し上げたのですが、一切聞き入れていただけず、そればかりか、これ以上断るようならこちらとしても出る処に出る、などとおっしゃって——」

「まあ……酔狂な人みただから」

何処に出る気だ、と冷めたことを思いながら、雫は肩を竦めた。桜はか細い声でこう続ける。

「兎に角——御劍様と同じお宿で休めるとは——桜は果報者です」

「え？ 今なんて」

「何でも御座いませんツ」

慌てて桜は打ち消した。雫は首を傾げた。

気づけば、すっかり日は落ちていいる。そちこちで道行く者の下げる提灯の火が揺れているが、まともな灯りと云えばそれだけである。また妖怪がどこからか現れるのではないかと雫は気が気でない。今度ばかりは桜の手前、逃げるわけにもいかないだろう。

しかし幸いなことに、三人が宿に着くまでは、何事も起こらなかつた。

伽羅俱利屋の軒には夜になると、冗談としか思えないほど無駄に大きい、屋号の筆書きされた提灯が二つもぶら下がる。これがよい目印になっていて、暗い中でも迷わず辿り着くことが出来た。どれだけ巴が効能を狙ってやっているかは知れぬが、少なくともこれが、繁盛の一因であることは確かである。

その提灯の前で雫が桜に向かって、一緒の部屋で寝よつか、と戯れに誘い、桜が気を失いそうになっているとき。

颯太がおい、と雫に声を掛けた。

「——妙な声が聞こえんか」

「声？」

「何か——呻き声が」

「また変な紐引つ張ったんじゃないの？」

あくまで雫はつれない。意地を張って、怖さを誤魔化している部分もある。

だが、颯太はあくまで真剣だった。

「何か——此方の、奥の方から」

云いながら、隣屋との合間の狭く湿った暗い路地を、颯太はひよいと覗き込んだ。それからすぐにまた向き直ると、颯太は雫を見た。

眉間に深く皺を刻んでいる。

雫も真面目になって、颯太、桜と共にその路地へ向かった。

「う——う、う」

驚いたことに——。

そこにいたのは、瀕死の侍だった。

血の染みた着物は、そこかしこが裂けている。まるで鋭い爪か何かで剥ぎ取ったかの如く、散り散りに引き千切れていた。そしてそれは着物だけでなく、着物の下の、軀も同じであった。眼を背けたくなるような、酷い様を晒している。雫は息を呑んだ。

侍は土の上に俯せになり、乱れた鬘に顔色を蒼白にして、虚ろな眼で何事か云いたげに、口をぱくぱくと動かしていた。

「あ、あ——」

「どうしたの!？」

駆け寄ると雫は問う。尋常な事態ではない。

何者か、途方もなく恐ろしいものに襲われたとしか思えなかった。

侍は掠れた声で、何とかこう、応えた。

「あ、あやかしに——襲われ」

そこで酷く咳き込んだ。血を吐いている。ひい、ひい、と息も苦しげで、

もう長くないことは明らかだった。何とかその言葉を聞き取ろうと、雫は懸命に、彼の口元へ耳を寄せる。

「ふ、文、文を——奪われた。早くせぬと——江戸が、危ない——ひい、ひ、姫が、姫が、あ——あやかし、に——」

再び、何度も強く、腹の底から咳き込む。

そして、最後に、

侍は、動かなくなつた。

雫たちは沈黙する。

その時不意に厭な気配を感じ、雫はさっと空を見上げた。

巨大な真黒な影が、町の外れに向けてばさばさと羽ばたいていくのが、屋根の合間の夜闇に紛れてうっすらと見えた。

五

「何という事じゃ——」

沈痛な面持ちで、浄瑠璃姫は声を漏らした。すっかり見慣れた姫の居室で向き合う雫たち三人も、最早何も云えない。

雫は、素直に頭を下げた。

「申し訳ありません姫様、その……私の力が及ばず、ご家来をあのような目に」

「御剣みこころの所為ではない——その者が死んだは巡り合わせ。憎むべきは、許し難き妖怪あやかしどもじゃ。妖怪あやかしどもが、我が、家臣を——」

言葉に詰まり、姫は黙した。雫は俯く。

暫しの間、聞こえてくるのは部屋の外の微かな喧騒だけだった。

程なくして、すつと静かに部屋の襖が開く。巴が、哀しげな表情を浮かべて入ってきた。

「今、外に役人方が来て検分してるよ。まあややこしいところはこつちで何とかしておくから、姫様もお待さんも心配しなくていい。しっかし——人死に出るとはね」

「済まぬ」

驚いたことに、謝つたのは浄瑠璃姫だった。

「斯様なことになるとは思わなんだ。わらわを狙うておるだけならば他の者は襲うまいと多寡を括つておったが——宿の評判を下げることになるやも知れん。世話になっておきながら、悪いことをした」

「ふふふ、いやだよ、そんなこと思ふんなら端から泊めたりしないって。うちに泊まつている間は、何があるうとうちが面倒を見ますから、お気になさらず、ね」

笑いながら、平素通りの軽い口調で巴は応えた。颯太がううむと唸りながら、首を捻る。

「それにしても——やはり元凶は、あの鴉か」

雫は、先程目の当たりにした大きな影を思い起こした。あれだけ距離があつてもはつきりと羽音が聞こえるほどの、信じがたい大きさの鴉であつた。まさしく怪鳥といった態で、あんなものに襲われたら、いかな手練れであつても一溜まりもないであろう。

雫は、先の侍の胸に深く刻まれた爪傷を脳裏に浮かべる。

彼の無念な顔に、気が沈む。

「町の外れの方角へ、飛び去っていったな」

颯太が云うと、それを受けて桜が応えた。

「あの方角には確か、小さな鎮守の森に囲まれた、お社が御座います。

何を祀つておいでかは存じ上げませんが——辺りには他に目だった場所は御座いせんから、もしかすると」

「恐れ多くもその森に隠れ潜んでいるやも知れん、というわけだな」

有りそうな話だ、と颯太は頷いた。しかし雫には、今ひとつぴんと来ない。

「……妖怪が、神社に潜んでるの？」

「邪鬼は邪なる魅のこと、一元を辿れば大いなる力を持ち、人に仇為す神にも至りましょう」

「神と妖物を隔てるのも、最後には人に害を為すか否かだ。根っこの部分では、さして違いはないぞ」

桜と颯太に続けざまにそう説かれ、雫はふうん、と呟いた。何やら不思議な気がした。雫が神と妖怪に対して持っている感覚と、かなりずれがある。単純に、聖なるものと禍禍しきもの、というだけではないようであつ

た。

「左様か——ならば、その鴉とやらを何とかせねばなるまいな」

浄瑠璃姫は重重しく云う。桜がすぐに肯った。

「はい——御劍様。あれがきつと、妖怪あやかしの源に御座います。何としても、何としても打ち倒し、江戸に元のような安寧を」

「何を他人事のように云うておる、桜」

雫の手を取って固く握り、目を輝かせて熱弁する桜に向かって、口をへの字に曲げて妙な顔をした浄瑠璃姫は、冷たくこう告げた。

「そなたも共に参れ」

「——は」

は、という形のまま口が開き放しになった桜は、巴の人形のようにぎこちない動きで、姫の方を向いた。姫はべちぺちと、無感動に扇子で畳を叩いている。桜は恐る恐る尋ねた。

「姫様、その、今、何と」

「だから。御劍、東雲しのめと共に、そなたもその社へ参れ、と申しておる」

「え。わ、私も行くのか」

今更ながらの颯太の動揺した言葉に、今度は雫が耳を疑う。じとりと睨み付けてやると、露骨に颯太は視線を逸らした。はああ、と姫は呆れ返った溜息を吐く。

「なんじやそなたら、御劍一人に行かせるつもりじゃったのか。薄情な連中じゃのう。なあ御劍」

「……まったくです」

「い、いやその、姫、私は一介の絵描きを志す貧相な男に過ぎず」

「わ、私わたしも、ただの町娘に御座いますから」

二人は懸命に両の手を突き出して断ろうとする。巴は部屋の隅に座り込んで、面白そうにその様子を眺めている。

ふう、と息を吐くと雫は腰を上げ、颯太の背に回り込んでその襟首を猫のように引っ掴んだ。

「姫様、まあこいつは嫌がろうが何しようが私が首根っこ引っ張って連れられますが、しかしその、桜ちゃんまで巻き込まなくても」

桜は当人の云うとおり、何と云うこともないただの町娘である。颯太以

上に役立つとは考えにくい。無理に連れ込んでも危ういばかりであろう。するとそれを聞いて、姫は鼻を鳴らした。

「この者を連れて行かずば何処にその社があるか判らぬではないか。それに——桜、そなたこそ御剣に付き従って行きたいのではないのか。ええ、どうじゃ」

目を細めて頬に手を添え、加虐的な云い振りで姫はにやりと口の端を上げる。云われた途端、桜はぼつと顔を赤らめた。

「いえ、決して、そのようなことは——」

「いずれにせよ、二人だけでは心許なからうて。辺りの様子を窺う者が一人くらいおつてもよからう——それともなにか、ついて行かれぬ理由でもあるのか」

訝かしむようにそう問われ、桜はいいえ、と即座に首を振った。

「御座いません——」

「ならよい。わらわのことは心配するに及ばぬ。わらわにはそこな、護りの雛人形がある。巴と共に此処におるから、襲われる気遣いはなからう」

「何かあったらあたしが全兵力を駆使して総掛かりで討ち取ってやるから、安心して行つてきな。宿の守りはそこの田舎藩より万全だよ」

笑みを浮かべて巴は云う。雫は逆に安心できない。

「さあ、支度をして参れ。出向くのは、そうじゃな、草木も眠る丑三つ刻、妖怪が最も力を得ておる刻がよからう。なまじつか向こうが弱きときじやと、するずるとどこぞへ逃げられる虞がある。戦うときは正堂堂、正面から行くが武士じゃ。うむ」

さあ者共、頼んだぞ、と満足そうに姫は結んだ。

六

——そして、丑三つ時。

ぐうすか仮眠を摂っていた颯太の隣で一向に寝付けなかつた雫は、諦めてそのまま出かける支度をした。宿の玄関口で「伽羅俱利屋」と大書された手提提灯を巴に手渡されると、ぐったりと肩を落とす。

「なんだいお侍さん、情けないねえ。男が廢るよ」

「初めから廢れてます」

気の利いたことを云い返す気力もない。

(丑三つ時にわざわざ行けって……滅茶苦茶だよなあ)

宿には一応他の客も泊まっているため、なるたけ音を立てないよう雫はそつと部屋を出た。別室で休んでいた桜は先に支度をして待っていてくれたのだが、颯太は何時まで経っても起きてくる気配がない。仕舞いに、雫が叩き起こしに行く羽目になった。

そうして部屋でぐずぐず云っている颯太が着替えている間に、玄関口へと戻った雫は、桜が手に持っている何やら不可解なものに気づいた。

「何、これ？」

「巴様が先程、身の守りにと渡してくださいました。南蛮渡来の武器を巴様が改造されたものだそうで御座います。この引き金を引くと、火縄を換えずとも何度でも撃つことが出来るというお話で——」

巴の趣味で無意味な飾りや謎の紋章が大量に付けられてはいるが——明らかにそれは、回転式拳銃であった。雫は青ざめた。

確かにこの時代既に存在したものかも知れぬが、しかしこれが何なのかもよく判っていないような少女に渡すべきものではない。まして改造済みのものなど心配で仕方がない。すると巴はこう云った。

「いやこれはね、改造して、弾が当たると相手が眠るだけにした奴だから。そんな深刻に考えることないって」

そうして巴は、腰に手を当てからからと笑うばかりである。そう聞かされても雫はまだ、あまりいい気はしなかった。麻醉銃であっても、いざ使うとなれば何が起こるか知れない。

とは云え、丸腰のまま連れて行くわけにもいかないだろう。

「……まあ、それはなかなか危ないものだから……本当に窮地に陥ったときだけ、撃つようにしようね」

「はい、判りました」

雫が云い含めると、素直に桜は頷いた。

丁度その時、颯太がふて腐れたような顔で奥から出てきた。雫は尋ねる。

「筆と紙は持ってきた？」

「うん」

「墨は？」

「ある」

「廁には行った？」

「——ちよつと待っててくれ」

雫の問いかけに言葉少なに応えると、颯太はいそいそと奥に戻っていった。

自分で云ったことながら、まるで母子おやこの会話のようで雫は無然たる思いにかられる。颯太のあの態度も、眠いからなのか行くのが嫌だからなのか判然としない。兎にも角にも颯太の絵の力は最後の頼りなのだから、きちんと目を覚ましておいてもらわなければ困るのである。

少し経って颯太は、澄ました顔で帰ってきた。

かくして三人は巴に見送られ、夜更けの江戸の町へと繰り出した。

煌煌こうこうと照り輝く大きな満月を別にすれば、雫の持つ提灯の明かりだけが頼りである。勿論辺りには、人っ子一人いない。三人の歩く時に鳴る砂利の擦れる音だけが、やたらと大きく聞こえた。時折何処かで犬の鳴く、おんおんという声が聞こえ、雫は僅かに身を震わせる。

「——怖いのか」

桜に聞こえないよう雫の耳元に口を寄せて、颯太が云った。

「別に」

「無理をせずともよいぞ」

「無理してない」

しかし本当のところ、雫は相当無理をしている。何しろ昨日の今日である。怖がるなど云う方が無理がある。今にも何処かから何かが出てくるのではないかと、気が気でない。

びゅう、と風が吹く。

川辺の柳の、枝の影が揺れる。

柳の向こうに何かが、誰かがいた気がしたが――。

雫は見て見ぬ振りをして、急いで通り過ぎた。

「お、お待ちください御剣様」

帯に差した銃をかたかた鳴らしながら、桜が小走りで付いてくる。本来

ならば桜に案内してもらわねばならないのに、ついつい先を行ってしまふ。いけないと思つて、雫が立ち止まろうとした、そのとき。ふと気づいた。

その、後から追つてくる桜の足音が、二人分聞こえる。ぞつとして雫は振り返ることが出来ず、そのままの勢いですたすたと歩き続ける。すると更に、他のことにも気づいてしまった。

視界の隅に、何やら薄ぼんやりと光る、顔のようなものが見える。何をするでもないその生氣のない顔は、雫たちに付いてきている。

加えて遠方で、何か知れぬ白い炎が幾つも、ゆらりゆらりと揺れている。それは少しずつ、増えているようだった。

雫はごくり、と喉を鳴らした。

「……ねえ、颯太、あれ、聞こえる？」

路に沿つて流れる川、それにかかる橋の袂から、水音に混じつて微かに赤ん坊の泣き声が聞こえた。

哀れを誘う途切れ途切れの、小さな小さな声である。

——おぎやあ。おぎやあ。おぎやあ。

あるはずのない泣き声だった。

「ああ——聞こえるな」

颯太は囁いた。雫は、廻らない舌を懸命に動かして、背後から早足でついでくる桜に向かい、こう云つた。

「さ、く、ら、ちや、ん」

「はい——」

「は、走ろうか！」

云うなり颯太の手を掴むと、雫はどの男子も敵わない自慢の脚を生かし、全力で駆け出した。

それをきっかけにしたかのように——。

周囲の暗がりに潜んでいた妖怪たちが、一斉に動き出した。

火のついた車輪のようなものが、がたごとがたごとと派手な音を立てて雫たちの隣を転がっていく。その中央にはにたついた男の顔がついていて、雫を嬉しそうな目付きで頻りに見つめてくる。雫は泡を吹きそうになった。

——突然。

「どすん、と音を立てて、目の前に大きな毛の塊のようなものが何も
ない中空から落ちてきた。」

塊には目鼻口が付いていて、汚らしく微笑んでいた。

「わあああああああああああああ！」

「み、御剣様、此方に御座いますッ」

恥も外聞もなく叫び逃げ惑いながらも、雫は桜の言葉に従って路を行き角を曲がり、次第次第と町の外れに近づいていく。全力で走る雫に引きずられるまま息も絶え絶えの颯太とは対照的に、桜は不思議なほどきちんと後をついてきていた。

何番目かの角を曲がったところで、いきなりぐよぐよとした醜怪な脂肪の塊のようなものがふらふらと道を歩いているのに巡り会った。真正面からそれに思い切りぶつかつた雫は、弛んだ気色の悪い皮膚の感触に、また町中に響き渡る叫び声を上げる。

「ぬっぺっぽう——」

颯太が何か云っているが、雫は何も聞いていない。

土煙を上げながら、三人は江戸の町を駆け抜けた。

どの暗がりにもどの物陰にも、何かしらの怪しき妖しき化物が潜んでいる。その全てに雫は対面しては、あらん限りの声で絶叫していた。もう自分でも何が何やら判らない。

何処からかまたけられけられけられけられけられけられという女の嗤い声が聞こえてきて、もう雫が泣き出しそうになったとき。

桜が先方を指さした。

「あれが、そのお社の鳥居に御座いますッ」

消えかけた提灯の明かりでそれを確認した雫は、殆ど何も考えぬまま、其方へ向けて突進した。

そして——生い茂る木々に囲まれた古びた鳥居の中へと、雫たちは転がり込んだ。

神社と云うよりも桜の言のとおり、ただ小さなお社があるだけの、自然のままの森である。風に吹かれた木木の影が、寂しく妖しく揺れていた。

「あー、はあ、はあ、はあ、はあ……」

敷き詰められた砂利の上に倒れ込むと、雫は乱れた息を何とか整えた。

颯太は、横で呻き声を上げて引つ繰り返っている。大して脚力もない者がよりにもよって雫と手を繋いで走るなど、飛脚と老人を紐で括り付けるようなものであつて甚だ非人情な話と云える。

一方、殊の外疲れた様子が見えない桜は、鋭い目をして辺りの様子を窺っていた。

「ど、どう、桜ちゃん、何か、いる？」

「——いえ、御剣様。何も見当たりません」

あれだけ大きな鳥が見当たらないのであれば、今はいない、と考えた方がよいのだろうか。それとも、ここが相手の本陣である、ということ自体がそもそも考え違いだったのかも知れない。そう雫は、寝不足と疲労で調子が今ひとつの頭を無理に回して考えた。いや実際、そうならそれで構わない。なんでもいのでこの肝試しからさっさと解放して欲しい。

地面に寝そべったままの颯太が、何とか口を開く。

「そ、そう云えばお前たち。大きな鴉だ化物鳥だと頻りに云っていたが——実のところ、どのくらいの大きさなのだ。それが判らぬと、探しようがないぞ」

改めて颯太にそう問われて、雫は首を傾げた。

そう云えば空を飛んでいるところしか見たことがないから、具体的にどの程度の大きさなのか、未だに把握していない。ただ漠然と、大きかったという印象が残っているだけである。ばさばさという激しい羽音、異様な雰囲気から、そのように判断していたに過ぎない。

ゆっくりと立ち上がると、颯太は着物に付いた土埃をぱんぱんと払った。

「まったく。揃いも揃って自分たちがどんなものを探しておるのかすら判っていないのか」

そう偉そうに云いつつ歩いているが、まだ足元がふらついている。手近な鳥居にもたれ掛かると、颯太は一息ついた。

「そんなことでは、こんな夜中にこんな暗いところで鴉など見つけられるわけがないではないか。闇夜に鳥の譬えそのものだ。どうするんだ、埒があかんぞ」

疲れているとはいえ一人ぐっすり眠っている分、猶更威勢がよい。得意げに滔滔と説教する颯太を睨み付けながら、しかし雫は、ふと奇妙に感じ

た。

周囲に影になる物など特にはないはずなのに、颯太の姿が、矢鱈と薄暗く
て見づらい。提灯が消えてしまったからだろうか。

——いやに、暗いな。

その時。

ばさり。

酷く大きな羽音が聞こえた。

厭な予感がして、雫は顔を歪める。

颯太の立つ、暗い地面の影が揺らいだ。

そう云えば。

出ていたはずの月の光がない。

雫は——少しずつ上を向いた。

「ギャア」

耳障りな鳴き声が聞こえる。

其処には、広げた翼が空を覆わんばかりの巨大な鴉が、
鳥居に留まって雫たちを見下ろしていた。

七

人の顔ほどもある黒光りする眼、太く鋭利な嘴、艶やかな純黒の羽、
鳥居を強く掴む爪。

天を覆い隠すほど大きな鴉は、じっとこちらを見据えていた。

「雫——」

雫の視線の向く先に気づいた颯太と桜も、口をぽかんと開け放したまま、
化物を見つめている。颯太はゆっくりと、呟いた。

「——拙いぞ」

「分かってる……」

雫は腰に手をやる。今は、伽羅倶利屋で貸してもらった木刀を差してい
る。多寡が鳥相手だからこれでたくさんだろう、とその時は思っていた。
しかし目の前にいる妖物は、甘い予想と比較にならぬほど大きい。

「ぎゃあッ」

知らしめるように再び高く鳴くと。

鴉は鳥居から飛び立ち、真っ直ぐ雫の元へ滑空してきた。

素早く横っ跳びに避けると、雫はすれ違い様に木刀を厚いその羽に打ち込む。見事に当たったが、あまりの力の強さに雫はそのまま跳ね飛ばされて、ごろごろと神社の地面に転がった。

一応効いてはいるようで、鴉もギャアギャアと喚き立てながら飛んでいる。しかし雫の側も、咄嗟に受け身を取らなかつたら大変なことになっていたところである。痛みを堪えながら雫は素早く身を起こした。

一方、上空まで一旦飛び戻った鴉は、ぐるりと空中で廻って、またこちらへと風を切って降りてくる。

空を見上げたまま、顔を引き攣らせて雫は叫んだ。

「ちよっと颯太！ なんか出して！」

「え、な、なんかって何だ、ま、待て、今描く」

しどろもどろになりながら筆を執り始めたが、到底間に合わない。鴉の攻撃は始まった。

嘴くちばしを真っ直ぐ雫の方へ向けて飛んでくる。仕方がない。雫は足元の砂を引っ掴むと、思い切り投げつけた。目潰しである。卑怯でもなんでもいから、取り敢えず相手の動作を封じなければならぬ。

しかし、砂が来ると気づくや否や、鴉はぱつと横に避ける。

そして、その流れで片羽を使って、雫にはさりと風を送った。

とんでもない風圧で着物の裾すそが捲まれ揚がり、雫は真っ赤まになってそれを押さえつける。同時に、颯太が見ていないかと確かめるので躍起になってしまった。顔を向ければ案の定、筆を握ったままの颯太はぼうつと雫を見ている。

「だから何で今だけ私を見てるんだ！ 私のお尻お尻なんかいいから集中して描け……うわっ」

自分で投げた砂すなつぶ礫がが、思い切り自分の目に入った。

涙がボロボロ出てきて、雫は前が見えない。

「あーもー私のバカ！」

あれやこれやで血が上って訳が判らなくなった雫は、三度みたび飛んできた鴉

に向かつて、半ばやけくそで走り込んだ。

「御劍様ッ」

「お、おい雫、危ないッ」

二人の言葉も聞かずに雫は跳び上がると、木刀を叩き込もうとした。相手の頭へ斬り込んで前後不覚にするほか、もう術はないと考えたのである。そのまま勢いよく、一刀に振り下ろす。
ところが。

「……え、え、え、ちよつと、いや！」

跳び上がっても頭には全く届かないばかりか、丁度嘴の届く範囲に来たものだから、鴉は雫の着物の襟首を啜くわえて、あっさり持ち上げてしまった。

「やめ、やめて、なに、おい、こらあ！」

じたばた暴れて木刀を振り回す雫だが、かつんかつんと嘴に当たるばかりで鴉はびくともしない。

そうして、雫をぶら下げたまま――。

鴉は天高く、舞い上がった。

「いやだああああああああああああああああああ！」

――周りの空気が、一気に冷たくなる。

秋の空は、冬へ向けて既に変わり始めているのだなあ――などと雫は、真っ白になった頭の中で思った。

見れば、手の届きそうな場所に、眩まぶしく満月が輝いている。

遙かに眼下の町は、本当に真っ暗だった。灯りと云えば蠟燭ろうそく提灯ちやうちん行灯あんどん灯籠とうろうくらいしかないこの時代、夜半の空から町を見下ろしたところで、見えるものなど何もない。ただひたすらに暗い。そしてそれが、余計に怖い。兎に角静かで冷え込む上空を、鴉は焦らすようにぐるり、ぐるりと旋回する。

「……あの、妖怪あやかしだったら、言葉が通じたりはしませんか」

雫は自尊心も何もかなぐり捨てて、下手したてに出た。

鴉は何も応えない。

「ひよつとして、初めから全部分かってやっていたり……」

鴉は何も応えない。

「ええと……反省、してます。本当です。悪かったと思っています」

鴉は何も応えない。

「許していただけるとは思いませんが……どうかご勘弁を」

鴉は何も応えない。

「あの……」

鴉は何も応えない。

雫の堪忍袋の緒が、音を立てて切れた。

「……何か言え！」

「があ」

鴉は鳴いた。

そして。

嘴が開き――。

雫は落ちた。

「本当に私のぶあかあああああああああああああああああ！」

ぐるぐると回りながら、雫は江戸の町へ墜ちていった。

一日半ぶりの落下であっても無論一向に慣れない。生憎制服以上に緩い造りである着物は風に煽られ放題、辛うじて帯で留まっているだけで、その大半が脱げている。だがこんな状況では、恥ずかしがる意味もない。木刀だけは放さないようしつかと握ってはいたが、しかし内心雫はもう駄目だ、と絶望していた。

墜ちる先には、固い地面しかない。

(助かりようがない……)

本当に、泣き出しそうになった。

墜ちながらも雫は考える。ここは絵巻の世界だ。それは間違いない。しかし。しかしその中でもし死んだならば、自分はどうなってしまうのか。遊戯終了、元の世界に帰れるのか。否否、そんな都合のよい話があるものか。そんなもの、遊戯の中だけだ。

あの侍の、無惨な死に様が蘇る。

何時如何なる場であろうとも――死んだらそれまでだ。

「助けて……！」

そう眩きながら、抗う術もなく雫は、夜空をどこまでも墜ちていった。その時。

「……え？」

雫は気づいた。

落ち行く自分の真下の地面に——突如として巨大な毛むくじやらの何かが、ぶわっと現れた。

「わ、わ、わ、わ、わ！」

勿論足搔いたところで避けようもない。

雫はその毛むくじやらの中に、真っ直ぐ突っ込んだ。

ふかふかした柔らかい毛と動物の弾力ある躰で、雫はそのまま真上に跳ね上がる。

自分でも信じられないことに、怪我一つないままだった。

「間に合った——」

すぐ其処には、真っ新になった紙を広げて脱力する颯太がいた。

「颯太……」

そうか、こいつは——颯太の絵か。

月明かりの下、数度小さく跳ね上がるうち、心地よいその動物の毛の暖かさに包まれて、雫の心は優しく静まっていった。

そっと雫は、その大人しい動物の背から降りる。

そうして息を吐くと、少し歩いて、黙ったまま颯太の前に立った。

暫く向かい合う。

すると、颯太が頭を掻きながら、ちらちらとこちらを見てくる。何だろうと思っただけ自分の身形みなりを見てみると、着物の前がはだけて、中が殆ど見えていた。

「わあ」

急いで襟を合わせる。別に何も見ておらん、と颯太はぶつぶつ云った。

雫も何となく、云い返す気にならない。

次第に間が保たなくなってきた雫は、傍らに座する颯太作のもこもこした巨大な動物を見遣って、取り敢えず感想を述べた。

「その……可愛い……羊だね」

「虎だ」

「え……っ」

「——虎だ」

颯太の眼が据わっている。

確かに振り返って見直してみると、毛は黄色いし縞もある。それに確かこの時代、虎はまだ伝聞でしか伝わっていないはずである。北斎ほくさいや蕭白しょうはくの描いた虎図など、想像に想像を重ねた挙げ句、実物とは似ても似つかないものになっている。大急ぎで描いたことも考えれば、あまり責めるのも酷だ。

「あ、はい……虎です」

「うん。虎だ」

漸よちよちう頷いた颯太は、小さな声でこう付け加えた。

「——お前のために、途中で毛を描き足したのだ。文句を云うな」

「あ、ごめんなさい……」

雫は着物の帯を弄りつつ、俯いた。

また、二人は黙った。曖昧な時間が流れる。

「ぱあん——」。

すると、淡い空気を断ち切るように、不意に乾いた音が響いた。

何事かと二人が音のした方を見ると、そこでは青白い顔をした桜が、煙の上がる銃を構えて腰を抜かしていた。

更にその頭上では——何時の間にかまた降りてきていた鴉が空中にばさばさと留とどまりながら、次なる獲物を狙っていた。

「桜ちゃん！」

そんな雫の叫びも届かないほどの惑乱に陥った桜は、あわあわとしながら、麻酔銃をぱんぱんと連射する。しかし、初めて撃つ銃が相手に当たるわけもない。撃ったときの衝撃で狙いがずれて、鴉はぴくりともしなかった。

「——こ、このっ」

云うと桜は、堪えきれなくなったかのように、銃を鴉へ投げつけた。

不思議な程綺麗な弧を描いて飛んでいったそれは、鴉の太い嘴の端にかつん、と当たる。

鴉は不快そうに首を震わせた。

雫は唇を噛む。

——いけない。

「ぎやあッ」

一際大きく鳴き上ぐと、鴉は一直線に桜へ向かって飛んだ。

咄嗟に雫は、傍らの毛深い虎に再び跳び乗る。

雫の気持ちが伝わったかのように、虎はそのまま勢いよく駆け出すと――

迷わず鴉へ向けて、跳びかかった。

虎の背から、雫は果敢に踏み切る。

月光を背に、木刀を高高と振り上げる。

そして――。

「せいやあああああああああああ！」

鴉の脳天へ向けて、力一杯に振り下ろした。

八

遠方の空は、朝日に輝く紫雲が立ち籠めて美しい。

徐徐に明るくなってきた朝靄立ち籠める社の傍では――地に墜ちて動かなくなった大鴉を前にして、雫たち三人が漸く息をついていた。

万事が落着いてから、桜にも颯太の力の説明を済ませ、後は諸々の始末をどうするか、という状況である。

「御剣様、本当に――本当に有難う御座いました」

桜は丁寧な頭を下げる。これまでとはまた些か違うその真摯な様子に、

雫は照れて、早口に誤魔化した。

「いやそんな、別にそんな大したことはしてないから」

「いえ――御剣様に命を救われました。感謝のしようも御座いません。こ

のご恩は一生――忘れません」

顔を上げた桜は頬を朱く染めながら、澄んだ瞳で雫を熱く見つめていた。恥ずかしくなって、雫は眼を逸らす。桜は重ねて云った。

「東雲様も、描きし物に命を吹き込むそのお力、真実恐れ入りました。古今東西の如何なる画聖も敵わぬ奇蹟、永く語り伝えらるるものに御座いま

しよう。それにこの——」

桜はそう云いつつ、虎を見直す。

不細工な生き物は朝日を浴びながら、後足で顔を搔いている。

桜は、言葉に詰まる。

「この——猪も」

雫は青ざめる。

緩んでいた颯太の表情が、忽ち凶相になる。

「ほう」

「あ、いや、桜ちゃん、あのね……」

「猪に長い尾がついておるとは私も浅学にして知らなんだ」

必死に取り繕おうとする雫の努力も虚しく、颯太は仏頂面でそっぽを向いてしまう。

自分の失態に気づいた桜は、慌てて云い直した。

「いや、あ、あの、以前見かけた仔猪うりんぼが、丁度このような具合で」

「桜ちゃんもういい、もういいから」

大量の冷や汗を流しながら、雫は桜の口を押さえる。

「もうそのくらいにしておけ」

ぎろりと二人を睨み付けると、低い声で颯太は告げた。

「これ以上要らぬ事をぬかすと——そなたらの似顔を描くぞ」

「どうかそれだけはご勘弁を」

二人は声を揃えて頭を下げた。どんな姿の何が出てくるのか、恐ろしくて想像したくもない。

話がここまで来たところで、三人は改めて、颯太が描いたその「虎」を見た。ふわふわと柔らかな毛の生えた躰に、手早く雑に描いた所為か、黒眼がちで円つぶらな瞳になっている。此方を見ては、ぱちぱちと瞬いていた。

雫は呟く。

「まあ……割と可愛いし」

「ふん。今さら何を云おうと遅いわ」

「その、名は何というのですか」

懸命に取り返そうとする桜が尋ねた。颯太はまた鼻を鳴らす。

「名などどうでもよい。雫が適当に付けろ」

「私？　じゃあ……」

間拔けた面構えの虎を雫は見つめる。

「毛が多い虎だから……毛虎」

毛虎、と雫が呼びかけると、大きな態のその動物は、ぐるぐると喉を鳴らして喜んだ。段段大柄で不格好な猫に見えてくる。一方、格好良い動物を描いたつもりの颯太は不服そうだった。

「もうちよつと何とかならんのか」

「我ながらよく付けられたと思うんだけど……」

人懐こく頭をすり寄せてくるもこもことした毛虎を撫でながら、雫は首を傾げた。

恐る恐るその前脚の辺りを触りつつ、桜は更に颯太へ訊く。

「この仔は、この後どうなるのでしょうか。そのうち消えたりは」

「放っておいたらそのままだが——どうでしょうか。ここに捨てていいですか」

「更なる混乱の元になるからやめなさい」

可哀想だしね、と雫が云うと、判った、と颯太は肯った。

そうして懐から先程毛虎を描いた紙を出すと、毛虎に向けてぴんと張って開き、こう云った。

「——戻れ」

主の声に素直に従う毛虎は、足並み軽く颯太の方へ駆けると、紙に向かって飛び込んでいく。

吸い込まれるように、毛虎は紙の中へ消えた。

眼を円くする雫と桜を他所に、颯太はその紙をくるくる丸めて筒にする
と、胸元に挿す。

「これでよし。またいつでも好きなときに出せる。こいつはそれでいいとして——問題は、こっちだろう」

そう云って颯太は、薄暗い境内の中に横たわったまま、未だに動かぬ怪鳥を見据えた。鴉は、時折痙攣するように身を震わせている。こうなるともう、あまり恐ろしげには見えなかった。

「これはまだ気絶しているだけだ。本当にこれが妖怪の元凶ならば——考
えるまでもなく、殺してしまうべきだろうが」

不穏な言葉に雫は身を固くする。

——どうなのだろうか。

陽の光のあるところではどこか清純な印象すら受ける鴉の顔を眺めながら、雫が考え込んでいたときだった。

「——待て」

鋭く、しかしあどけない声が、森の奥、社の方から聞こえてきた。

驚いて雫はそちらを見遣る。

社の裏から姿を現したのは——。

いっぞやの町の辻で、戦いを終えた雫と対峙しそして立ち去っていった、暗く美しい顔の、あの童であった。

